

浦田健次郎先生(音楽学部・作曲)が 学生にすすめたい本

『安南 愛の王国』クリストフ・バタイユ著 辻邦生訳 (集英社)

18世紀末、フランスから安南(今のベトナム)へ派遣され、熱帯雨林の中で故国からも神からも忘れ去られてゆく修道士と修道女の物語。1993年の秋、フランス文学界は20才のこの作家に話題は集中し、ラディゲ、ランボーの出現とくらべたという。ごく短い文章を積み重ねてゆくような文体と、ストーリーの展開に圧倒される。

『ヴェネツィア・水の迷宮の夢』ヨシフ・ブロツキー著 金関寿夫訳 (集英社)

ロシア出身の詩人ヨシフ・ブロツキーは、1940年、旧ソヴィエト連邦のレニングラード(今のサンクトゥ・ペテルブルク)で生まれ、1972年アメリカに亡命し、1987年にノーベル文学賞を受賞している。51の断章からなる散文詩のような美しい文章を、気の向くままに、ゆっくりとたのしむがいい。水と光のブロツキーのヴェネツィアが、いつしか疲れた心を癒してくれる。

『朗読者』ベルンハルト・シュリンク著 松永美穂訳 (新潮社)

著者は1944年ドイツに生まれた法律家である。いくつかのミステリー小説を書いたのち、1995年に発表されたこの小説は、すでに30以上の言語に翻訳されている。物語は主人公と年上の女性の愛の物語だが、その背後には第2次世界大戦でドイツが犯した行為を原罪のように意識する作者のすがたが見える。そしてこの愛はあまりにもやり切れなく、残酷だ。私はこの本を読み終えたあと、しばらく茫然としていた。それから静かに重いものがこみ上げて来た。